

---

# 青空の下。

岬

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

青空の下。

### 【コード】

N7783B

### 【作者名】

岬

### 【あらすじ】

ひとり欠けてしまった、二人の話です。

青空の下。

親友の彼女を好きになった。でも、2人とも好きだったから、いさぎよく身を引いた。

よくある話だと思う。

けど、やっぱり悲しくて苦しくて申し訳なくて、しばらく泣いてしまった。

それでも。

そんな俺でも、平気だったんだよ。2人が、一緒にいることを許してくれたから。

なのに、どういいうわけだ。

俺とーかちんを置いて行くなんて。

藤夏を任せた、なんてそんなセリフ、嬉しくもなんともねーよバカトシ。

\*\*\*

見上げた空は、どこまでも青い。こんな空を見上げると、嫌でも思いたしてしまうヤツがいる。トシ。お前はこの空のどっかにいるというんだろうか。

いつも浸ってしまう後ろ向きな感傷は、半年経った今でも、まだ健在なようだ。

学校の屋上で、たったひとり。

手に持った菓子パンを食べる口は一向に進まない。

だって不味いよ。3人が1人になるだけでこんなに違うのかと、妙に感心してしまうくらい。

あーあ、はやまったかな。

まだここは駄目だった。思い出しちゃうんだよ、楽しかったあの

青空の下。

時とかあの時を。

俺は、なかば食べることを諦めて、固いコンクリートの上にだらしと手足を投げ出した。どこまでも高い空を見上げていると、もう、何もかもどうでもよくなる。例えば午後の授業とか。

不真面目な考えで目を閉じると、キィ、と屋上のドアの耳障りな音がした。

誰だ。

でも起きるのもめんどくさい。

ぐだぐだと寝そべったまましていると、急に辺りが暗くなった。面倒ながらうつすら目を開くと、突然影が落ちた原因がすぐにわかる。目の前の見慣れた人物のしわざだ。

「あー……とーかちん」

「あら朝ぶりじゃない、ユタカちゃん」

全開の笑顔を見ながら、そついや屋上で会うのはいなくなっただけから初めてだな、と思った。

\*\*\*

「こんなとこで何してんの。サボリ？」

「そーだよ。気持ちいいじゃないこんな天気いいし」

「まあいいご身分ですこと」

フェンスの前に、隣り合って言葉を交わす。何してんだらう、と思わないでもない。すでに5限目は始まった。

でも、俺もとーかちんも何も言わない。だからいーんだそれで。少し言葉のやりとりをすると、俺もとーかちんも何も言わなくなつた。すぐに屋上に静けさが満ちる。

それは嫌いじゃない沈黙。とーかちんとか……トシとー緒だった

青空の下。

ら。

「それにしても、さあ」

とーかちゃんが、ぽつりと言った。

「こんな空見てると、信じらんないねえ、アイツがいないなんて」

「……うん」

「バカだったし、何度死んでも死ななそうなヤツだった」

ほんとにね。

ちら、ととーかちゃんの方を見ると、透き通った瞳でフェンスの向こう側を見つめていた。

ここじゃないどこか、きつとトシのいる場所を見つめてるんじゃないかな、と思った。だって、綺麗過ぎて今にも消えてしまいそーだよ。最後に見た、トシの笑顔にどことなく似ている。

俺も、フェンスの向こう、空の彼方に目を向けた。

そうすれば、見える気がした。

とーかちゃんの見てるもの。トシの居る場所。

漠然と、きつと明るくてきれいで、こんな青空みたいな所なんじゃないかな、と思う。

でも、いくら目を凝らしても、空の青以外なんにも見えなかった。

「だけど、もういないんだよね」

しばらくして、とーかちゃんが小さく言った。

「いないんだよ。こことか、よく私達がいた場所に来ると、はつきりわかるんだ」

青空の下。

その声は震えていて、何となく、顔を見てはいけない気がした。言葉の代わりに、とーかちゃんの肩に寄りかかると、俺にも重みがか

かった。

「いないのに、ね。青い空を見るだけで、そこでアイツが笑ってるような、そんな気がするんだ」

「ばかだよ、と乾いた笑いをもらすとーかちん。」

「じゃあ、俺もばかだね」

「うん、ユタカもバカ」

問いかけに、即答される。

「でもさー」

「うん？」

「俺、トシは本当の本当に空のどこかにいるんじゃないかと思うんだな」

「うん、私もそう思う」

「おまけに俺らのこと見守ってるんじゃないかと思う」

「あらあら、奇遇ね、私もです」

「そして、トシなら、ちょっとくらいよくよしても許してくれると思うのですよ」

「……………。うん、そうだね」

「きっとトシなら、あの日から何も変わってない俺らを責めたりしないだろーね。」

「しょうがないヤツらだ、て笑いとばして、けつとばすだろーきつと。あのバカゆえの豪快さで。」

「久しぶりにすっかりと思い描いたトシに、暖かく、けどそれ以上に苦しくなる。」

青空の下。

「ねえねえユタカさん」

「なんだいとーかちん」  
「……泣いてるの？」  
「……とーかちんこそ」

気付けば、熱いものが頬をつたっていた。  
何でだろう。

トシがいなくなって、もうそれにも慣れたはずなのに。  
俺達は、お互いじつくりと顔を見合わせて、吹き出した。顔が真っ赤だ。涙どころか鼻水まで垂れてる。

そんなとーかちんの顔を見ながら、その隣にいる、トシの姿を描いてみた。こんな青空にふさわしい、思いきり笑顔の。

ああそうか。と、何となく思った。

そうか、悲劇の人でも美化した思い出でも何でも無い、いつものトシを思い出したのは、今日が初めてだ。

明日も明後日もいつまでも続くと思っていた日常の中のトシ。  
ごめんね、いつものバカで口が悪くて乱暴者のくせに、他のヤツのことばっか考えてるお前を忘れてて。  
やっとやっと、欠けてる部分が見つかった気がする。

トシ、ごめんね、ありがとう。

それから俺ととーかちんは、泣いた。ずっとずっと、時間がわからないくらい。声を張り上げて、ときどき罵声を吐きながら。

とーかちんも、同じ気持ちだったのかな。  
こんな泣いたのは、初めてだった。いなくなる前も、その後も。不思議だ。

苦しきだけ、溶けて流れて行く感覚がする。  
だってトシはここにいるんだよ。

楽しかったときも、辛かったときも、消えたりなんかしない。  
だからトシ……これからもよろしく。

青空の下。

\*\*\*

「あーあ、泣いた泣いた！ もう意味分かんね！」

「いつの間にか暗いし！ 意味分かんね！」

どれくらい経ったのか。気付いたら、辺りは、既に日が隠れて薄暗かった。どこからともなく、カラスの鳴き声が聞こえるのがちょっとせつない。

「もう、こんなの初めて！」

「俺もだねー！」

「でもすつきりした気が、しないでもないー！」

「どっちだよ！ でも俺もそんな気がしないでもないー！」

言い合って、ゲラゲラ笑いあう。

本当にもう、何がなんだか分かんない。

ただ、確かに分かることは、変にふっきれたこと。忘れるんじゃない、受け入れただけ。これからも、そのまんまのトシとーかちゃんと、生きていくために。

あと、もうひとつ。こんな一瞬がたまらなく愛しいこと。

……くさいこと考えてる辺り、俺もけっこういかれちゃったのかもしれないけど。でも、嘘じゃない。

青空の下。

「なー、とーかちん」

「ハイハイ何ですかユタカくん」

青空の下。

「また明日もよろしく」

「何、急に」

「明後日もしあさってもその次の日もずっとずっとよろしく」

「……いーよ、よろしくね」

(後書き)

2人の恋というよりは、3人の繋がりを書きたかった話でした。  
カテゴリーはこれでいいのかどうか悩みますが。

ありがとうございました。

青空の下。

青空の下。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7783b/>

---

青空の下。

2009年7月3日19時03分発行